

藤枝市史だより

第23号

平成22年11月10日発行
 編集 藤枝市文化財課
 発行 文化財・市史編さん係
 〒426-0014
 藤枝市若王子500 郷土博物館2F
 ☎054-645-1184

E-mail
 muse@city.fujieda.shizuoka.jp

徳一色城について

田中城は今川氏の代に築城され、当初は徳一色城と呼ばれていました。その名称が確認できる唯一の文書史料は、武田信玄が高山大和守に宛てた元亀元年（一五七〇）二月二十二日付けの書状で、「徳一色落居」と記されています（『藤枝市史』資料編2四一〇号）。徳一色城に関する具体的な史料はなく、江戸時代に編さんされた地誌にわずかな記事がみえるだけです。

それらによれば、徳（戸久）一色城は益頭郡の郡司一色左衛門尉信茂が築き、今川義元の代には由比美濃守が守り、由比が桶狭間合戦で戦死した後は、長谷川次郎右衛門尉正長が守将になったと記されています。

一色左衛門尉信茂についても史料はありませんが、『駿河記』には、益頭の郡司一色左衛門尉が、応安年中（一三七〇年頃）に遠目浦（焼津市浜当目）の岩山で観音像を発見して村岡山満願寺に移し、將軍足利義満に報じて仏供田を寄進したとする、村岡山満願寺観音堂縁起の伝承が記されています。

一色氏は足利氏の一族で、若狭・三河・丹後の守護や幕府の侍所頭人を務めました。『寛政重修諸家譜』所収の一色系図には庶流となる範房の系統に、「次郎左衛門尉」を称する詮定と、その兄満氏の子で「左衛門尉」を称する満重の名がみえます。満氏には「義満より諱の字を授けられ」との記載があるので、詮定と満氏は足利義満の頃の人物と考えてよいでしょう。

このように一色氏の一族に官途名「左衛門尉」を称する人物がいたことは確認できますが、一色左衛門尉信茂がこれらの系譜とどう関係するかわかりません。

一方、田中城の南の瀬戸川寄りに「一色」

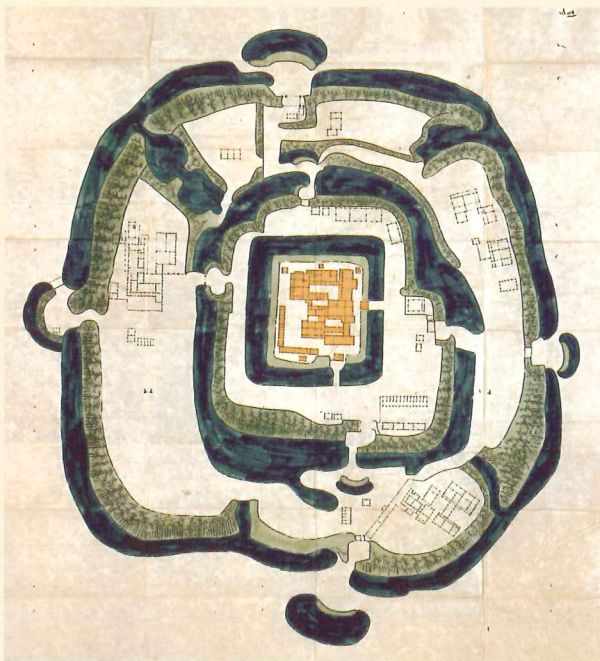
という小字名が残っています。一色の色とは種類・品という意味で、荘園領主に対して一種類の課役のみを負う田地を一色田と称しました。足利氏の一族である一色氏は、三河国幡豆郡吉良庄一色郷（愛知県一色町）が苗字の地でした。一色信茂の名字も、一色田に由来するかもしれません。徳一色の「徳」は「得」であり、一色田の得分を収取する権利を持つという意味であるとの指摘があります。

鎌倉時代の地頭屋敷の規模は方一町（約一〇九坪四方）で、その立地には防衛より交通の利便が優先されたといわれます。徳一色城の主郭の広さは方一町に近く、六間川と東海道という水陸交通の結節点に立地していることや、徳一色という名称などを考え合わせれば、この城の起源は一色信茂の居館に求められるでしょう。

先述した信玄の書状には、徳一色城は元来堅固な城なので普請をせず、本丸に三枝虎吉、二の曲輪・三の曲輪に朝比奈信置・同輝勝を置いたとあり、同城が今川氏の段階から三重の同心円構造であったことがわかります。一色信茂の居館跡を主郭として、二の曲輪・三の曲輪を増設したのは、長谷川氏ではないかと考えられます。田中城の主郭を囲む二の曲輪は羽子板状の平面形になっていますが、これは長谷川氏の居館である小川城（焼津市小川）の形状と共通するからです。

徳一色城は元亀元年正月に陥落しましたが、武田氏は丸馬出しの増設など改修を加えて、田中城と改名しました。戦国期の徳一色城・田中城については、新しい『藤枝市史』通史編上巻において詳述したので、ご一読ください。

（中世担当調査委員 小川隆司／県立島田商業高等学校教諭）



駿河国田中御殿之指図
 （財団法人永青文庫所蔵・熊本大学附属図書館寄託）

大井川の水の物語

一、荒れた河原を開田に

江戸時代以前の高洲地区は、大部分が大井川の砂礫と自然の低木で覆われ、川は自然に流れたままでした。慶長年間（一五九六～一六一五）に本流の大井川がしばしば洪水を起こして、志太平野がすっかり河原になってしまいました。

その後、寛永四年（一六二七）に対岸の榛原郡青柳村（現在の吉田町）では、岩堀家をはじめ、多くの田畑や家屋がすべて流されました。庄屋の岩堀兵太夫さんはやむなく離村を決意し、駿河の田中藩に申し出て、開墾（開墾）を申請して許可され、寛永

八年（一六三一）から同志ら一〇人と、荒れた河原を開墾し始めました。

「あばれ大井川」はたびたび洪水を起こして、せつかく開墾した田畑や家屋敷も一年に何回も流され、開田と流失の繰り返しだったと想像されます。しかし、努力の甲斐があつて翌

九年には二石九斗の年貢米を納められたと記録にあります。そして、年々開墾を進めて寛永十四年（一六三七）に七町八反の検地ができたといわれています。これが兵太夫新田の始まりです。

二、三角屋敷で洪水を防ぐ

大井川下流域の高洲・大洲には、三角屋敷（舟形屋敷）がかつて多く見かけられました。これは大井川の洪水による被害を避けるため、屋敷の北西に向けて土手を築き、大水を振り分けて家屋敷を守った名残です。そして土手に木や竹を植え、先端には神社を祀り、屋敷内に水防の道具や食料を入れる小屋を造りました。最近はこの三角屋敷が消失しているのが残念です。

三、大井川の材木を運搬

高洲を流れる木屋川は、その名のとおりで大井川から水を引いて、上流にある材木を焼津湊まで運搬し、江戸に送ったといわれています。今でも高洲には鉄砲場（川をせき止めて水を溜め一気に材木を流す仕掛け）という地名が残っています。現在は川幅も狭くなって様子が変わり、昔の面影はまったくありません。

四、川中島八兵衛さんを記る

この高洲には川中島八兵衛さんの碑が沢山見ら



木屋川べりの川中島八兵衛さん 安政6年(1859)建立

て、これを祀りました。祠は大井川の左岸（東側）に七八箇所あり、なかでも高洲には一二箇所が現存しています。今でも八月のお盆には灯明をあげ、ご詠歌などのお祀りをしています。

五、貴重な農業用水に

やがて明治時代になり、大井川の堤防護岸工事が本格的に実施され、洪水氾濫も減ってきました。志太平野の中心を流れる栃山川は重要な河川ですが、大雨の時は水害が起き、とくに明治四十三年（一九一〇）の大洪水の被害は悲惨を極めました。大正時代になって用排水工事が行われ、昭和六年（一九三一）に完成して以来、栃山川の水害はまったくなく、農業用水も確保され大きな成果を挙げられています。

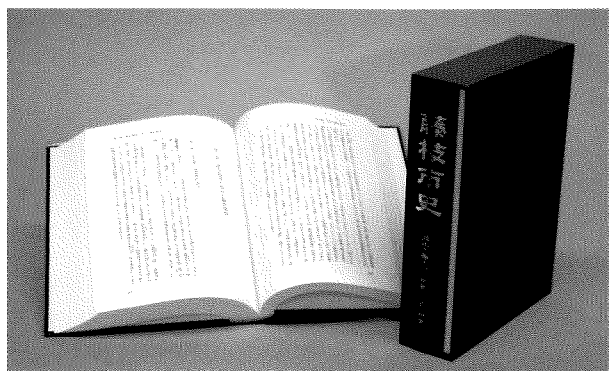
（市史編さん調査協力員（高洲地区） 塚本秀平）



空から見た市内与左衛門・原田家の三角屋敷

40年ぶりにリニューアル!!

待望の『藤枝市史』通史編上 原始・古代・中世 が刊行されました。



郷土の歴史を深く知るうえで必須の新しい『藤枝市史』
通史編上は藤枝市郷土博物館で販売しています。

これまでに刊行された資料編五巻と最新の研究成果にもとづき、各分野の歴史研究者一九名の執筆による新しい通史編が刊行されました。通史編上では原始から中世まで、時代を追って藤枝の歴史をわかりやすく解説しています。四〇年前の旧市史とは内容も一新され、新しい史実や知見が数多く盛り込まれました。

藤枝が志太地域の政治・経済・文化の拠点として、特色ある歴史を歩んできたことが実感できます。郷土を深く知るための歴史事典としても、ぜひ活用ください。

● 体裁

A5判上製本・八四二ページ・ケース入り
カラー付録図「志太平野を中心とした古代東海道と条里地割推定図」付き

● 叙述した時代 藤枝の旧石器時代から戦国時代まで

● 価格 一冊四、〇〇〇円

● 販売場所 藤枝市郷土博物館

※お求めは、電話〇五四―六四五―一一〇〇へ
千四二六―〇〇一四 静岡県藤枝市若王子五〇〇

◆『藤枝市史研究』第一二号を刊行しました。

市史編さんの調査のなかで新たにわかった研究成果を紹介しています。一一号では、米軍側の資料から戦時中の藤枝空襲を初めて裏付けた論考や、水運や王領をキーワードに藤枝の古代・中世史の核心に迫る学習会報告などを収録しています。

● 内容

【研究ノート】泉井園旦松宛書簡について（山全誠）／
藤枝防空監視哨資料による警戒警報・空襲警報発令・解除一覧（村瀬隆彦）

【資料紹介】米軍資料『作戦任務報告書ミッション2018』と一九四五年一月九日藤枝空襲（土居和江）／
心岳寺祠堂帳について（湯之上隆）

【学習会報告】ここまでわかった古代の藤枝（原秀三郎）

● 体裁 B5判・モノクロ・九〇ページ

● 価格 一冊八〇〇円

● 販売場所 藤枝市郷土博物館

◆シンポジウム「ふじえた歴史再発見」を開催しました。

『藤枝市史』通史編上の刊行を記念して、藤枝の原

始・古代・中世の歴史を再考するシンポジウムを開催しました。市史編さんに携わった第一線の研究者が、通史編上の特色や最新の研究成果を市民に分かりやすく紹介し、新しい藤枝の歴史像に迫りました。

● 日時 平成二十二年七月十九日（例）午後二時～五時

● 会場 生涯学習センターホール

● 内容 【時代別の基調講演】

・ 藤枝の農耕文化の形成と集団関係（篠原和大氏）
・ 志太地域と古代国家（山中敏史氏）
・ 中世藤枝の交通と寺院（湯之上隆氏）

【シンポジウム】

「ふじえた歴史再発見」

―藤枝の個性はいかに育まれたのか？―

コーディネーター湯之上隆氏ほかパネリスト五名

● 来場者数 二六八名

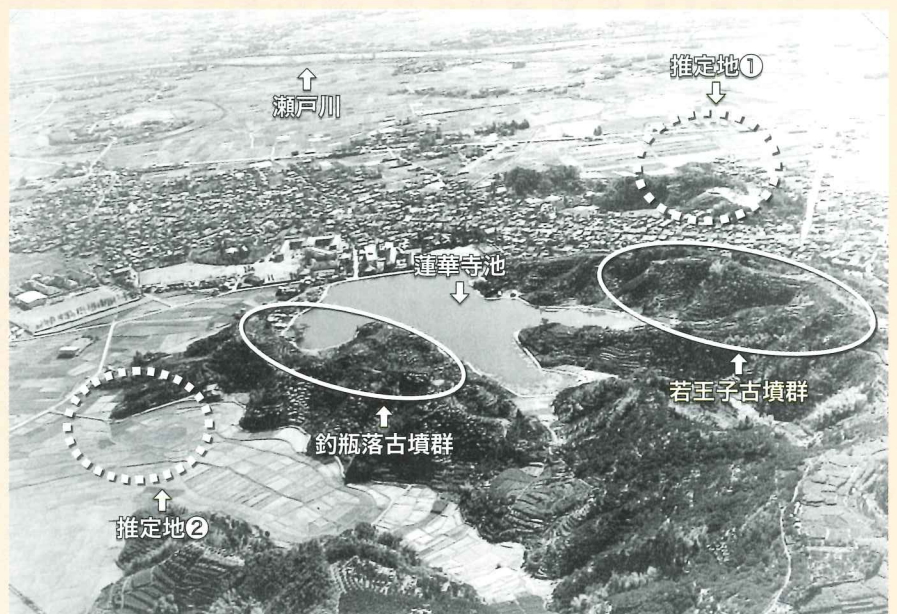


5人の講師から時代ごとに新しい研究成果が報告され、
藤枝の歴史研究の最前線が紹介されました。

わかにえのみやけにやくおうじ 推贅屯倉と若王子古墳群・釣瓶落古墳群 つるべおとし

『日本書紀』によると、駿河国には、稚贄（皇子）へ捧げられた獲物という意味）と呼ばれる屯倉（大王などが所有していた施設や領地）が設置されていました。この稚贄屯倉は、各地にあった屯倉を再編し、聖徳太子に与えられたものであり、再編される前には、生贄屯倉と呼ばれ、神や大王などに、生贄（生節のカツオなど）を献上したので、生贄という名称になったと推定されています。カツオは、加工保存に適していただけでなく、夏の到来を告げる初物の魚として珍重され、新嘗祭などで、神や大王へ捧げる獲物として重視されていたと考えられます。

富士市の和田川が、かつて生贄川と呼ばれ、この付近では、聖徳太子に関わる史料などが見つかっていることから、生贄・稚贄屯倉は、和田川の付近にあったと考えられています。そして、この周辺の役人が、六世紀頃には、物部氏と関係する珠流河国造、八世紀中頃には、壬生部（皇子などに労働や物品を提供した人）と関係する壬生直であったことから、この屯倉は、五三五年頃に、物部系の一族により、大王の生贄屯倉として設定され、五八七年に物部氏が滅ぼされると、聖徳太子の稚贄屯倉として再編され、膳系の一族が管



「稚贄屯倉」推定地の周辺 昭和30年（1955）頃の空撮写真に加筆

県安堵町の付近）だけであったこと、白猪屯倉は、岡山県などに分散していた屯倉の総称であったことなどを踏まえると、『日本書紀』の稚贄屯倉は、駿河湾沿岸の各地に設置されていた屯倉の総称であったのかもしれない。

『和名類聚抄』や『延喜式』に記された藤枝市内の飽波郷や飽波神社は、掲載写真の推定地①（現在の飽波神社の周辺）や推定地②（藤枝市時ヶ谷の小字「飽ヶ崎」）と見なす説があります。どちらの説を取るにしても、蓮華寺池の周辺には、聖徳太子の稚贄屯倉が設置され、定期的に、舟を使って荒堅魚などを届けていたと言えそうです。

また、蓮華寺池の周辺の丘陵上には、四世紀の後半から六世紀の前半にかけて、この付近の有力者が、継続的に埋葬された若王子古墳群や釣瓶落古墳群があります。これらの古墳群には、（生贄・稚贄）屯倉の経営に関わった人やその先祖が葬られていた可能性があり、今後、そのような方面から、この古墳群について、検討していく必要があるかもしれません。

（古代担当調査委員 岩宮隆司／大手前大学非常勤講師）